

第103回

『雨粒を真珠のように輝かせた あなメモ』編曲家

私が大学在学中だったのは昭和40年代後半になりますが、遅く起きた日曜の朝といえば、NHK総合テレビで放送されていた『あなたのメモディー』という視聴者参加型の音楽番組がよく見ていたものでした。視聴者が応募してきたオリジナル作品を5曲ほど厳選し番組で披露、審査員に批評してもらい、番組最後に一般参加者による投票で週間優秀作品を選び、再演奏されるという構成でした。

私が見ていた当時の審査員として、高木東六、服部正などクラシック系の作曲家、石本美由起、星野哲郎といったベテラン作詞家、そして当時『誰のために愛するか』が大ベストセラーとなっていた作家の曾野綾子などが交代で登場していたように記憶します。

この番組から誕生した代表曲に、トワ・エ・モワが歌った『空よ』、北島三郎で大ヒットした『与作』があります。『与作』が最初に登場したときには、後に演歌の作曲家と

して『ふたり酒』『天城越え』などをヒットさせた弦哲也が、ギターを抱えながら思い入れたっぷりに「へ

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも



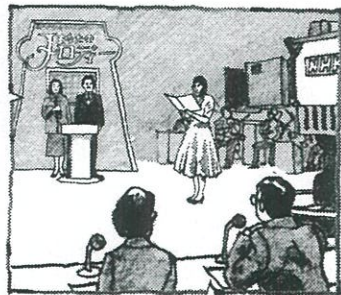
堀井六郎
絵・松本浦

イハイホー」と歌っていました。時に演歌タイプの曲が紹介されると、高木東六が「僕は好きじゃないなあ、こういう曲は」と忌憚なく評するケースもありました(苦笑)。

入選者にとって最大の魅力は、自分の創った作品がテレビを通じて知ってもらえるという満足感とともにプロの歌手に歌ってもらえるという特権にありました。もちろん当時の弦哲也のように名が知られていないケースもありましたが、運がよければトップクラスの人気と実力を持つ歌手に歌ってもらえるのですから、創作者冥利に尽きます。また視聴者にとっては、テレビで見慣れた歌手が楽譜を手に持ちながら歌う姿は、持ち歌を歌うときのポーズとは異なり、これもまた新鮮でした。

当時、軽音楽バンドで編曲を独学していた私は、作品の印象が編曲次第で大きく異なることから作品紹介の際にテロップで流れる編曲者名に目が向かいました。その中の一人に一ノ瀬義孝がいました。

昭和48年、卒論用の資料として持っていた『日本流行歌史』(社会



思想社)などを調べていたとき、加山雄三が『君といつまでも』で惜しくもレコード大賞を逃し特別賞に甘んじた際の昭和41年大賞受賞曲、橋幸夫の『霧水』の編曲家が前出の一ノ瀬義孝であることを発見します。同年、橋が『霧水』以上にヒットさせた『雨の中の二人』(詞・宮川哲夫、曲・利根一郎)、その続編『汐風の中の二人』も一ノ瀬の手による編曲であることがわかり、なぜかそのとき妙に納得できたように思えました。『雨の中の二人』は、それまで橋が歌ってきた吉田正の曲調と明らかに違っていたからで、バイオリンと女声コーラスが奏でる前奏などは、まさに雨粒がキラキラと輝く小粒の真珠であるかのように錯覚させてくれるほど、アレンジの魅力に富んでいたのです。

一ノ瀬は昭和44年に『夏の日の思い出』の日野てる子と結婚、これを機に日野は第一線から退きます。『あなたのメモディー』に日野が出演していた記憶もあるので、番組がもたらしたピンクのバラの花のような「歌の中の二人」だったのかもしれません。